

玉川学園・玉川大学の学外施設を活用した 授業展開の意義と役割

—ナナイモ校地、カナダ野外教育演習に着目して—

The significance of utilizing Tamagawa Nanaimo Campus and its important role:
The focusing the Outdoor Education Program in Canada

村井伸二、難波克己

Shinji Murai, Katsumi Namba

キーワード：ナナイモ校地、野外教育、アドベンチャー教育、体験教育、環境教育、国際理解教育、グループダイナミクス

Keywords：Tamagawa Nanaimo Campus, Outdoor Education, Adventure Education, Experiential Education, Environmental Education, Education for International Understanding, Group Dynamics

1. はじめに

玉川学園の12信条の中に、自然の尊重として「雄大な自然は、それ自体が偉大な教育をしてくれる。また、この貴重な自然環境を私たちが守ることを教えることも、また大切な教育である。」¹⁾がある。この信条から理解できるように、玉川学園・玉川大学内には豊かな自然が溢れ、教育の場としての環境が融合している。林の中に咸宜園や松下村塾といった施設が現れ、また隣接して礼拝堂と小原記念館が自然と目に入ってくる。これらの施設を見ながら歩くだけで、自然の中から歴史を感じながら学んでいる感覚がある。施設だけではなく、中学部の奥には農作を行い通常の学校では学校外の特定の場所まで行かないと作業ができないような農業体験が可能な畑が学内に存在する。また、その奥には奈良池や竹林があり、ここが学園の中なのかと思う程静かで、自然を感じる場所がある。そして、大学農学部農場では農学部の学生が日々、農学における植物の育成方法の調査などを行っている。このように東京都内に位置しながらも、玉川学園・玉川大学の様な自然を感じながら自然を学び、自然から学ぶことが可能な立地条件が整う学園も珍しいであろう。これだけでも玉川教育にとって自然への尊重がどれだけ教育の中で重要視されているのかが理解できる。

玉川学園・玉川大学では学内だけではなく学外施設も所有している。創設者小原國芳の出身地である鹿児島県南さつま市久志には玉川大学久志農場、北海道釧路湿原の上流に位置し、屈斜路湖、摩周湖に挟まれた場所にある北海道弟子屈農場、近隣では箱根の温泉地の近隣に位置した畑宿に須雲塾演習林場、そして国外ではカナダのブリティッシュコロンビア州、バンクーバー島のナナイモ市に玉川ナナイモ校地が存在し、大学農学部を中心に実習、演習、そして他大学との交

流などが行われている²⁾。これらの学外施設においてはほとんどが農学部の演習林や農作物収穫の実習場となっており、農学部の学生が主に活用している。日本学術会議（2008）の提言の中には自然環境の悪化に伴い環境教育の重要性が叫ばれているが、大学などでの学ぶ環境が整っていないことが指摘されている²⁾。このことから学園の財産といえる「自然の尊重」が表現されたような施設を持つという意味は大きく、広い視野での教育と捉えた時に様々な活用方法を見いだすための環境設定が可能ではないだろうかと考える。

そんな中、玉川大学TAPセンターではアドベンチャー教育、体験教育を玉川学園・玉川大学に提供している。また、大自然という本来の野外環境に飛び出して体験を通じながら教育について学ぶことができる教育学部の「野外教育演習」を指導して今年で10年目となる。この演習は今まで主に農学部が活用していた学外施設であるナナイモ校地に着目して野外教育を中心に環境教育、また国際理解という視点を持ちながら、教育活動の可能性をひめた総合的な教育演習を実施することを目的としている。

本稿はこのカナダ野外教育演習の意義や役割、そしてこれからの展望について解説することはとても重要であることだと捉え、この野外教育演習についての概要を説明する。

2. ナナイモ校地（TNC：Tamagawa Nanaimo Campus）について

「学園の学生、生徒たちをカナダの大自然の中で教育してやりたい。公害の無い、空気も水も澄んだ自然環境に触れながら、永遠を想い、労作に汗を流し、勉学にいそしむことの出来るような地を見つけたい」前学長である小原哲郎の言葉である³⁾。

国際教育の振興を基に玉川学園50周年を記念した際にカナダのブリティッシュコロンビア州、ナナイモ市において34平方メートルの土地を購入した。当所はイングリッシュインターナショナルスクールの前進としてナナイモ校地が設立された。この時代から今日の課題であるグローバル教育を予測し、先進的に取り組もうとしていた先見の明にはとても驚くとともに、カナダの広大な自然のような玉川教育の懐の深さを感じる。

その後、ナナイモ校地はK-12の8年生の海外宿泊の場として活用されるようになった。また2003年からは玉川大学農学部生物資源学科生物環境情報コースが、バンクーバーアイランド大学（VIU: Vancouver Island University）（旧マラスピナ大学）と提携をすることによって1学期間、バンクーバーアイランド大学の授業に参加し、ホームステイや実習などを行いながらここナナイモ校地を活用している。

2008年には教育学部の授業をTAPセンター（当時：心の教育実践センター）のスタッフが担当し、カナダ野外教育演習として開講された。以降、6年の月日が経ち、年々にプログラムの改善と発展を続けている。このように玉川学園・玉川大学ではカナダの大自然に恵まれ、地元の大学などの教育施設とも連携されているナナイモ校地という特別な財産を有効活用した教育プログラムが展開されている。

ナナイモ校地（TNC：Tamagawa Nanaimo Campus以下TNC）はカナダ、ブリティッシュコロンビア州ナナイモ市（人口約79,000人の島内第2の都市）に存在する。日本からのアクセスとしてはバンクーバー国際空港に到着し、車でバンクーバ市の南にあるツワッセン（Tsawwassen）まで移動する。BCフェリーに乗り換え、ナナイモのディパーチャー・ベイ（Departure Bay）へと移り、そこから車で約15分たらずでTNCに到着する。TNCの周りには牧場など多くあり、と

てものんびりした広大な土地である。TNCの約10万坪の広大な敷地内にはメインビルディング（オフィス、食堂、キッチン、ゲストルーム、多目的ルーム等）、宿泊棟（2階建てで宿泊室、トイレ、シャワールーム、洗濯機、乾燥機を完備）、とても味があるログハウスの建物であるマラスピナホール（研修や講義が行える）、そして周りにはホールデン湖がありそこではカヌーなどの体験が可能である。⁴⁾ 早朝には湖の幻想的な霧中から湖畔に生息するビーバー達の顔を覗き見ることもできる。

TNCはさまざまな教育的な教材としてのポテンシャルが無数に存在し、その活用方法における可能性は計り知れないものがある。そのためにはなんのために（Why?）、どのように（How?）行うかといった教育目的やねらいがあることにより、この財産といえる施設がさらなる価値を高めていけるのではないかと考える。教育プログラムとして形にしていくためには、その目的とねらいを基にしながらも、現実はどういったプログラムが安全に遂行されるかという企画から施行までのプロセスを経ていくことが重要である。

3. 野外教育演習までの経緯

2002年にその当時は非常勤講師だった現TAPセンター長代理が、玉川学園・玉川大学の保有する学外施設であるTNCがカナダ、バンクーバー島にあることを知り、教育学部専任教員と実際に現地へ足を運んで調査を行った。その時のナナイモ校地の日本人ディレクターとアシスタントとしてカナダ在住の現地職員がナナイモのスタッフとして勤務をしていた。このスタッフも野外教育に強い関心を持っていたことと、野外教育および環境教育のフィールドとして素晴らしい環境を保有しているキャンパス内に、教育プログラムを開発する価値を見出していた。当時の教育学部学部長に新規授業計画を提案したが、まずは教育学部の教員が野外教育への関心を持っていたので国内において可能なキャンピングインストラクターの資格を取得でき、国立の青少年野外教育施設を利用しての野外教育演習コースを開講することとなった。国外としてのカナダ、TNCを利用して野外教育を行う海外コースの開講を立案したが、実施までに3年の準備を費やしてついに実現したが、初回は2005年度の9月の15日間の旅ということとなった。本来は1学期間、あるいは1年間、あるいはそれ以上の期間を費やしてカナダの土地で野外教育、環境教育、英語コミュニケーションなどといった領域において学びを深めることを望んでいたが、現在の枠組みではその活動範囲と時間枠（約2週間）としての現状を維持することになっている。このような思いと行動によって国外における野外教育演習が実施されるまでに至った。

4. 演習の目的とねらい

カナダ野外教育演習という遠方であるカナダのTNCを活用し、授業を行うためには人材と費用がかかる。さらに、移動時間だけでも約1日かかることから物理的にも負担が強られる。それでもこの場所で授業を実施させたいというためには意義ある教育目的やねらい、つまり使用する学生における教育的なメリットが必要である。

野外教育演習の目標として以下のような項目がある。

- ・カナダの自然公園の中でのミニマムインパクトなキャンピング、トレッキングを重視したプログラムの体験を通して、遠征型行動のあり方、健康管理、リーダーシップ、環境面を重視した

野外生活法を個人とグループの目標設定からの達成を目指す。

- ・異文化の中で自己認識を深め、英語を使って現地の大学生、留学生との交流を通してコミュニケーションにチャレンジをする。カナダ、ブリティッシュコロンビアの多様な文化の中で自分の文化を振り返り、国際理解に繋がる理解を促す。

これらの目標を作成する上での野外教育演習の内容を構成していくためには、理論的な背景を理解しながら実施することが必須である。ここでは野外教育演習の活動内容に影響している中心的な教育要素について紹介する。

① 野外教育 (Outdoor Education)

Ewert (1989) は Outdoor Adventure Pursuits においては心理的、社会的、教育的、生理的な分野において潜在的な効果があると述べている⁵⁾(表1)。このことから野外教育演習ではカナダの大自然の中で過ごすことは心身共に健康に良いといえる。それと共に自然の中で生活していくことは自然について理解するための知識と技術が必要となる。活動を通じて学びながら自信を深め、個人だけではなくある数人のグループで行動することにより、自然の中でどう協力しながら目標を達成していくかという課題解決をしていかなければならない。野外教育では自然環境の中でどのように社会を構築していくかという総合的な問いに取り組むことができるのである。

また、野外教育演習では3泊4日～4泊5日のストラスコナ州立公園のトレッキングキャンプを行うことから、野外でどのように自然と共に生きるかを学び、自分について考えながら仲間とどう協力していくかという社会性を考える。つまり自然環境や人間環境という総合的な環境について学ぶことを目的としている。それには野外で過ごすための最低限の技術が必要となる。トレッキングキャンプではストラスコナ州立公園内の使用規定に従いながら行動しなければならない。テント設営場所では他のキャンパーもいるので騒がない、また動植物に影響を与えないために焚き火をしない、登山トレイル以外には入らない、キャンプサイトでの食材や薬品などを食材用のロッカー (Bear proof food locker) 場所に置かなければならない。そのことにより熊などの動物がキャンプサイトに食物を求めてやってくることで問題を回避するなどの野外倫理 (Outdoor Ethics) や、野外で生活していく上で自然に対して最小限のインパクトで過ごすための技術 (Minimum Impact) について理解し、学んでいく。ここでは Leave No Trace* をモデルにしながら歯磨き時のうがいの仕方、野外調理の後の残飯処理、排水の仕方、そして飲料水の確保方法などについて学ぶ。このように日常生活ではとても考えないような体験をしながら、自然への畏敬の念を感じ、尊重していくことを体験する。このことで参加学生たちは自然と共に生きていくことの難しさと喜びを体感していきながら自然と調和していくのである。

② 環境教育 (Environmental Education)

野外教育演習では大自然をフィールドにして、トレッキングキャンプを行うことで自然環境の中でどのように生活していくかを体験する。その中でも、ストラスコナ州立公園の中のアルバートエドワード山を目指すトレッキングがある。毎年積雪量が代わり、トレッキングをしながら実際にアイスフィールド (通年雪が積もっている場所) の所に実際に足を踏み入れることで、環境について体感することができる。もしその場所に雪がないという意味は今年の冬期の積雪量が減ってきているということが推測出来る。その影響が下の湖の水位を下げ、また、気温などの気候の状態によって州立公園内に生息するブルーベリーの実の量を変化させる。これらの環境の変

表1 Potential Benefits of Outdoor Adventure Pursuits 野外アドベンチャープログラムの潜在的効果 (Ewert,1989)

Psychological 心理的	Sociological 社会的	Educational 教育的	Psysical 身体的
Self-concept 自己概念	Compassion 同情	Outdoor education 野外教育	Fitness 健康
Confidence 自信	Group cooperation 協力	Nature awareness 自然への気づき	Skills 技能
Self-efficacy 自己効力感	Respect for others 他者尊重	Conservation education 保護教育	Strength 体力
Sensation seeking 感覚要求	Communication コミュニケーション	Problem solving 課題解決	Coordination 調整力
Actualization 現実化	Behavior feedback 行動反応	Value clarification 価値の明確化	Catharsis 浄化
Well-being 良行な心理状態	Friendship 友情	Outdoor techniques 野外技術	Exercise 運動
Personal testing 個人評価	Belonging 帰属感	Improved academics 学力の向上	Balance バランス

動、生態系についても体験的に学ぶことができるのである。各学生においては単にこのカナダの大自然のパノラマに何かを感じている。日本の野外環境下とは違い、危険場所に柵がある訳ではなく、また、定期的な場所に販売機や売店がある訳でもない。この全く違った環境といえる大自然と向き合うことで、自分の内面と向き合うことで気づき生まれるのである。

また、毎年各専門分野のゲストを迎え、講義を行ってもらっている。ある年には環境毒理学の専門家からは東日本大震災の時に流れていった日本家屋がバンクーバー島で発見されたことから海流と環境についてを学習した。このことから海流から日本とカナダについて生態系的のつながりから地球の大きさを実感する。また何年もかけて漂流物に付着した生物がカナダに流れ着きそれが外来種としてカナダの生態系に影響を与えている事を学習した参加学生においては、地球規模での関係性を感じながら、講義を通じて環境について考える機会となるのである。

TNCで生活することで環境について学ぶことができる。オリエンテーションの使用の説明ではスタッフから「シャワー3分以内でお願いします。」と説明される。呆然とした顔の学生達は水の確保の仕方（井戸水をくみ上げる）を知ることにより、日本では気にせず水を使用する生活からは考えてもいなかったようなことについて異文化を感じ、自然環境と生活様式とのつながりについて理解していくのである。このように野外教育演習では講義、トレッキングキャンプ、そしてTNCでの生活の中などという、あらゆる環境化から総括的な教育につなげることができる。

Priest (1986) は野外教育を分類した際に環境教育は生態系の中で生物が共存していくことを学ぶ生態系的関係性と自然環境と人間社会においての統合を学ぶことなどがあると述べている⁶⁾。このようにTNCをベースにしてトレッキングキャンプを行うという立地条件を考えても、環境教育を学ぶ場所としてはとても優れていると言える。環境問題が叫ばれている昨今だが、これから担う学生達のことを考えても、この壮大な自然を守っていく方法を模索しながら、持続可能な教育 (Education for Sustainability Development) を目指し、野外プログラムのカリキュラムづくりに反映していきたいと考えている。

③ 国際理解教育 (Education for International Understanding)

カナダという海外で教育を行うということは、その場や環境に適応していくために言語や文化を理解していかなければならない。カナダというとても広い国土の中で、その中でもバンクーバー島のある一部にある第2の都市ナナイモ市は歴史と文化に恵まれている。ここで生きた文化を体験しながら、その地の人や自然と触れることによって体験的に理解していくものがあると考えられる。野外教育演習では近隣にVIU (Vancouver Island University) との連携により、ナナイモで勉強している学生と交流することによって言語はもとより、文化の多様性について考えることができる。活動としてはESL (English as a Second Language) の留学生との交流の場をいただいている。世界約50カ国から留学生を受け入れているVIUとの交流は、カナダを通じて世界の文化と触れる事のできるとも貴重な時間であるといえる。この交流の時間においてアイスブレイキングやコミュニケーションを図る事によって、日本のことを英語で尋ねられたりするなど、多様な国の学生に対してどのように何を話していく事が良いのか戸惑いながらも交流する。そのことで、参加学生自身が個々の英語学力のレベル、また自分の世界観の小ささを改めて痛感し、さらに勉強をしていかなければと認識する機会になっているようである。このような体験を通じて小原が言う「国際心の養成」が育んでいくのではないかと考えている。また、ビクトリア、バンクーバーでは観光の時間も用意している。学生たちは自らプランを立て、地図を元にどこに行くかを決定する。そして現地の人と直に触れ合うことで言語はもちろんのこと、日本ではない緊張を感じながら立ち振る舞いの仕方といったコミュニケーションの大切さなども体験しながら学んでいくことができる。

④ グループダイナミクス (Group Dynamics)

この演習では参加登録した時点から、前回出席した先輩の学生から情報を得ながら参加者同士どのような準備が必要なのかを自ら入手していく。学生の多くは登山の経験がなく、どのような道具を準備していけばよいのか良く分かっていないからである。そこから積極的に行動に移していかなければ準備が間に合わなくなってしまう。ナナイモに移動してから本格的なグループワークが始まり、アイスブレイキングや目標設定を行うことによって演習が各学生において具体的なものとなり、学生において自主的に受け入れられていくのである。また、生活していく中で個々の考え方や普段の生活の相違が摩擦となることがある。そこで課題をどのように解決していくかがとても重要となり、グループとして成長する機会でもある。トレッキング中では約15kgのザックを背負い、長距離を移動して、またテント設営や自炊を行う。この野外教育演習ではNational Outdoor Leadership School (以下NOLS)*が推奨している野外調理技術 (Outdoor Cookery) を参考にしながら、野外炊事という活動に着目している。NOLSは「調理は皆が旅にでるといった「life skills」のひとつである」とあり、特にPlanning (食事計画) が重要となることを述べている⁷⁾。トレッキングキャンプの前からグループごとに分かれて3泊4泊分の食事メニューを企画し、食材をどのように分配しながら持って行くかまでを考える。また、山に適した食材を考え、どの様にゴミを最小限に済ますか、さらに栄養を考えながら保存が利く食材を学生達が自ら選択するのである。山やキャンプサイトでは自分たちが自炊を行う。ガスバーナーで調理する上での火加減や調理時間、後片付けやゴミの分量までを計算していかなければならない。この作業を通じて、自分の意見を主張し、相手の意見を受け入れながら、野外調理を通じてグループとしての目標を達成していくかという課題解決にもつながっていくのである。また、このような野外生活

を通じて、次第に生活しながら学生達において疲労が積み重なっていく。その中で個人がどのように感情をコントロールしながら他の仲間のことを考えて行動していけるか。そして、疲労感や他者との関わりの中でネガティブな思考になっていくという悪循環に陥った際、どのようにポジティブな思考に転換し、行動していけるかが重要である。Martinら（1969）はLeadership skillsとして、遠征活動がグループの関係性においてとても重要な役割を担うと述べている⁸⁾。このことから野外の生活上でどのように振る舞いながら他者と共存することはとても重要な要素であり、様々な思いや葛藤を経験しながらグループの成長につながっていくという、グループダイナミックスの醍醐味がそこにある。参加する学生たちは自分と社会とのつながりや自分のあり方について、体験的に学んでいくのである。

⑤ アドベンチャー教育、体験教育（Adventure Education, Experiential Education）

まさに、体験から学ぶ、体験して学ぶ（Learning by doing）ことを主にした野外教育演習のベースとなるものである。さらに皆で考え、共に学びあう中でエラーが生じたときに、そのエラーから何を学び、どのように成長へと移行できるかを考えていくためのふりかえりを行う。Stanchfield（2007）は「ふりかえりはグループのプロセスが統合されたものであり、その体験が日常生活やその後の学びを築き上げていく⁹⁾。」と述べている。このことから個々と他者が学び合い、成長に重要なふりかえりを積極的に取り組むことが出来るプログラムを提供しようと志している。この教育演習は希望者が自ら参加しているものである。学生は多くの国際交流プログラム、交換留学プログラムの中から野外教育演習を選択し、また日常からの変化を求めて参加していること自体が「自ら一步を踏み出してみる」というアドベンチャーなのかもしれない。そこからまた演習を通して、自分の限界からどのように飛び出して成長していくかという要素を重要視していくことが野外教育演習のベースとなっているのである。

トレッキングキャンプ中では夜テントで寝る前に学生みんな集合し、その日の活動におけるふりかえりを行った。「今日はどんな一日であったか」、「どのように感じていたか」などの問いに対して身体的に疲れてきた学生が無意識にネガティブな言動「疲れた、もうだめだ」が多く、他の学生のモチベーションを下げていたことに気づいた。「これからは仲間にとってプラスになるような行動や言動をしていきたい」といった内容を語り合う。Proutyら（2007）は「ふりかえりが目標設定や意見の出し合いなどを通じて、グループ自身の発見や学びにおいて役に立つ」¹⁰⁾と述べていることから、一日の活動後に学生たちがグループふりかえりを行うことによってそのことで、次に日からグループのためにポジティブな言葉で関わろうとする行為が変わっていく。このようにこの演習では体験学習において、体験とふりかえりとの相互関係が意味をなし、学びにつながるができる環境を設けることに心がけている。

このように野外教育演習は「アドベンチャー教育、体験教育」をベースにしながら「野外教育」、「環境教育」、「国際理解教育」、「グループダイナミックス」といった分野を統合させながら、玉川らしく独特でユニークな演習であると言える。また、学生達にカナダの雄大な大自然の中でしか味わえない体験をすることにより、包括的な野外教育を学生に提供できているのである。

5. 野外教育演習の展望と課題について

カナダ野外教育演習は教育学部を中心に今年度で10年目を迎えたが、来年度の2016年度からはUS科目「国際研究」として登録され、全学部の学生が参加対象となる予定である。それを考えると教育学部だけの「教育」という観点だけではなく、他の学部における学習効果に視野を焦点にあてて、プログラムを考えていく必要性がある。

これから多くの学生に参加してもらうためには安全を配慮しながら参加費の軽減ということも考えていかなければならない。今現在の演習ではできるだけ費用を安価に抑えるために、なるべく旅行会社のサービスを使わずにDo it yourself (DIY) 方式で行っている。初年度はバンクーバー空港からフェリー乗り場～ナナイモ校地まで大型バスを貸し切っていたが、節約について安全性も配慮しながら空港からは乗り合いでタクシーに乗ってフェリー乗り場まで（往復共）、帰国日にはバンクーバー市内のホテルより、Canada Line（無人運転電車）にて空港まで向かうという努力をしている。今後の課題としては、参加費用を抑えながらいかに滞在期間を増やすか。

また、新しいプログラムを開発していくことが演習の発展に影響していくと言える。今のトレッキングキャンプで使用しているストラスコナ州立公園内のトレイルはほんの一部にすぎない。今後は広大な公園内をさらに開拓し、また素晴らしい違った景観を学生に見せてあげられることを望んでいる。今まではトレッキングキャンプ以外の活動においても今までは地域の野生動物保護センター訪問、ビクトリア市への観光と同市内にあるIBスクール（国際学校）を訪問、アドベンチャーセラピーを行うNPO組織の活動の講義、カナダのファーストネーションの文化を学んでいる部族の子ども達が通う保育園・幼稚園に訪問し、子どもとの交流、文化、保育に関する学びを得る体験などを提供してきた。今後は更なる分野におけるネットワークを増幅させ、人脈をさらに増やしていくことで、これまで以上のプログラム開発も可能であると考えられる。

その経緯は教育学部が中心となっていたもので、教員を目指す学生においてカナダ野外教育演習が目指すものが合致していたといえる。しかし、教員という進路だけでない広い視点に立ち、この教育演習の経験を通じて自分の目指す道を見だし、歩み続けている卒業生たちがいる。この演習を境に、ある学生はさらなる野外教育を目指しアメリカの大学院に留学し、勉学を志した。またある学生は海外青年協力隊に参加している者、海外の日本語学校の教員として飛躍している者もいる。もちろん国内の教員となって頑張っている者も含めて皆、社会人として活躍している。野外教育演習は「教育」について考える場でもあるが、学生各々が社会に出て社会人としてこれから自分がどのように世に役に立っていくのかという「人生」を考えていける場でもあると考えられる。この演習では、社会人として必要とされている「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」といった社会人基礎力（経済産業省、2006）¹¹⁾や、WHO（1999）が提唱している「Life skills」¹²⁾といったこれからの将来に向けて必要不可欠である「生きる力」を育てていくための要素がふんだんに盛り込まれている。そのため、他学部の学生においても大自然の中で体験的に活動を行いながら、学生個々の人生をふりかえり、これからの学生生活も含めて将来を考えるキャリア志向においてもインパクトを与えられるものだと考えている。

この野外教育演習が今では教育学部においての「2単位」として換算されている。この単位取得が他の学部でも認定されていけるかが演習の発展にもつながる。また、この野外教育演習は10名から20名までを引率教員（TAPセンター）2名で引率及び指導を行っている。少ない人数に対して時間と費用を費やしている分、その教育的比重は大きいといえる。今後も引き続きこの野

外教育演習を継続していくためにはこの授業に理解を示し、野外の知識と技術をファシリテーションしながら学びにつなげられる指導者の養成を考えていく必要がある。そして、今後の野外教育の広がりを見込め、他の大学においてもこの野外教育演習がモデルとなってプログラムを広げていくことにより、玉川学園・玉川大学が野外教育としてのリーダーシップを発揮し、さらに教育に貢献していけるのではないかと考える。

この演習を通じて体験的に得た知識と技術は将来のかけがえのない財産になっていくのではないかと考えられる。今現在は教育学部の授業となっているが、今後は教育学部だけでなく他学部にも反映できるような玉川学園・玉川大学独自の「野外教育学」といった資格として認定を必要とされていくのではないかと予想している。まずは玉川学園・玉川大学内において、「環境エデュケーター」の様な学内独自の資格制度として、環境教育の人材育成システムを構築する事ができるかもしれない。また、そこから発展していくことにより、欧米で実施されている National Outdoor Leadership School といった野外指導者としてのリーダー養成制度をモデルとしていながら、学内独自でありながらも、総合的な野外教育の資格や指導者養成システムとしての構築に向けての可能な要素を野外教育演習は持っていると考えられる。まずは少しずつではあるが、野外教育演習での効果的なカリキュラムづくりを遂行していきながら、教育的効果も測定し、この教育的にメリットのある制度を見据えながらも発展し続けていきたいと考えている。このことで、多くの学生において大自然の中で人生をふりかえりながら、充実した人生について考えていく機会を得ることにより、将来のキャリアとしても役に立つような授業を提供していけるのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では10年の経緯を踏まえながら、カナダ野外教育演習の概要を述べてきた。この授業の歴史を考えると、これまで約200名以上の学生たちがカナダの雄大な自然の中で、友と生活を共にしながら語り合い、そして学び合ったことになる。玉川大学に入学して全人教育を学びながら異国の地であるカナダにおいて、野外教育を通じながら、さらなる全人教育を実践する学生を支援させていただけることにとっても意味深さを感じる。

これからは教育学部の演習としての「教育」だけではなく、国際教育研究としてグローバルでありダイバーシティ（多様性）な、より広い視点を持ちながらの全人教育の実践を目指し、立派な社会人としての育成を援助していかなければならない。それには上にも述べたように、玉川学園・玉川大学において、このカナダ教育演習の意義と役割を多くの人に知ってもらうことが重要である。それには実践研究も含めて教育演習の教育的効果を明らかにし、発信していきながら学部を超えた協力体制を作っていくことで、カナダ法人TNCの活性化にもつながると考えられる。

今一度、玉川学園・玉川大学の教育的財産に目を向けて価値を共有していくために、他学部と協力して玉川学園・大学においてさらなる貢献に向けて支援していきたい。また、さらなる発展として他大学とも連携を深めることは、玉川教育から野外教育としてのフラッグシップを掲げ、常に開拓者となっていく価値がある。TNCは遠いカナダでありながらも玉川教育を感じながら日本と世界のつながりについて深く考える事ができる貴重な財産である。この場所を基点にして、さらなる野外教育演習の発展をこれからも模索していきたい。

このことは雄大な自然を真の教育者と仰ぎ、カナダの大自然の中で学ばせてあげたいと願って

いた先人達の「思い」を継承しつつ、発展していけるのではないかと考えている。

- * Leave No Trace : 1990年にNOLSとUnited States Forest Service (USFS) との間で組織された団体であり、野外生活という環境における倫理について焦点をあてた体験的なプログラムを提供している。また資格の発行や指導者講習会などによって普及活動を行っている。
- * National Outdoor Leadership School : 登山家、環境活動家である Paul Kiesow Petzoldt (1908-1999) が野外で生きていける人間を育てたいという願いから1965年に創設された野外指導者養成の学校である。野外活動の技術を学び、環境や人への貢献のためのリーダーシップを学ぶことが使命とされている。

【参考・引用文献】

- 1) 小原國芳 『玉川教育—玉川学園三十年—』 玉川学園出版部 1930年 pp.25-26
- 2) 日本学術会議 『提言 学校教育を中心とした環境教育の充実に向けて』 日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育分科会 2008年 pp.7-9
- 3) 玉川学園50年史編纂委員会 『玉川学園50年史』 玉川学園 1980年 pp.788-789
- 4) 玉川学園ナナイモ校地 <http://nanaimo.tamagawa.jp/japan/> 2016年1月15日確認
- 5) Ewert, Alan W. (1989). *Outdoor adventure pursuits: foundations, models, and theories*. pp.48-49
- 6) Simon Priest. (1986). *Redefining Outdoor Education: A Matter of Many Relationships*. Journal of Environmental Education. 17 (3).
- 7) Claudia Pearson. (2012). *NOLS Cookery*. STACKPOLE BOOKS. pp.pix-2.
- 8) Bruce Martin, Christine Cashel, Mark Wagstaff, Mary Breunig. (1969). *Outdoor Leadership Theory and Practice* Human Kinetics. pp.143-144.
- 9) Jennifer Stanchfield. (2007). *The Art of Experiential Group Facilitation Tips & Tools*. Wood' N' Barnes Publishing. pp.12-13.
- 10) Dick Prouty, Jane Panicucci, Rufus Collinson. (2007). *Adventure Education Theory and Applications*. Human Kinetics. pp.104-105.
- 11) 経済産業省「社会人基礎力」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> 2016年1月15日確認
- 12) Department of Mental Health World Health Organization Geneva. (1999). *Partners in Life Skills Education, Conclusions from a United Nations Inter-Agency Meeting*. Department of Mental Health World Health Organization.